

読書

1995年(平成7年)1月22日 日曜日

『クレイジーな時代にはクレイジーな組織が必要だ』が原題。型破りな売れっ子経営論者トム・ピーターズの、「経営セミナー」講演録だ。

とにかく威勢がいい。いわず起業家になりなさい。分権制など生ぬるい、巨大企業も数人規模の独立採算単位に分割しなさい。社外の人脈や通信ネットワークを頼りに仕事をしなさい。社内の仕事はあらかた外注し、競争相手の仕事を請け負いなさい。クレイジーで普通の組織に比べ込めぬ人間を雇いなさい。これでもか、これでもかというハ

トム・ピーターズの経営破壊

トム・ピーターズ著



（平野勇夫訳、TBSブリタニカ・1,600円）
11月18日発売。1月17日トーハン調べ「ビジネス書の部」4位。公称10万部。「読者は男性を中心に20代から70代と幅広い。経営者だけでなく、若い社員が自分の生き方を考える参考にしている。2月には著者が来日講演する予定」と版元。

環境の厳しさが見すえる

代を迎えつつある企業環境の厳しさをしっかり見すえているからだ。新製品はすぐ真似(まね)される。情報を一瞬に世界を駆けめぐらされる。それなら、現場に権限を委ね、速戦速決で顧客を捕まらねばならぬ。本社のあらかた不要になる。ごく少数の常勤スタッフのもと、数カ月単位で集まりさつと散る事業チーム。バーチャルコーポレーションがその究極の姿だ。そこまですく企業は多くなるが、時代がどちらに進むかは明らか。本書で紹介されているヘーグ氏(オックスフォード大)は、未来の大学は人材バンクと電子図書館を組み合わせたものになると言うが、まさに同感。日本の大学も徹底的な「革命」が必要だ。

ベストセラー診断

橋爪大三郎(社会学者)

チャメチャな提案に、邦訳題名が『経営破壊』となった。『(つぎ)してしまつた経営』である。なるほどと納得する。

世の中の「経営セミナー」には独特のノリがあるらしく、これにちまうまま

せられて自分の会社を潰す(つぎ)してしまつた経営者も少なくないだろう。それでも私が、ピーターズ氏の機軸のような語り口には、説得力を感じる。彼が、いまマルチメディア時

代を迎えつつある企業環境の厳しさをしっかり見すえているからだ。新製品はすぐ真似(まね)される。情報を一瞬に世界を駆けめぐらされる。それなら、現場に権限を委ね、速戦速決で顧客を捕まらねばならぬ。本社のあらかた不要になる。ごく少数の常勤スタッフのもと、数カ月単位で集まりさつと散る事業チーム。バーチャルコーポレーションがその究極の姿だ。そこまですく企業は多くなるが、時代がどちらに進むかは明らか。本書で紹介されているヘーグ氏(オックスフォード大)は、未来の大学は人材バンクと電子図書館を組み合わせたものになると言うが、まさに同感。日本の大学も徹底的な「革命」が必要だ。

読書

1995年(平成7年)3月19日 日曜日

1995-3-19/4

ベストセラー診断

橋爪大三郎(社会学者)

デリバティブ(金融派生商品)という名の妖怪(よろかい)が、英国の老舗(しにせ)証券ベアリング社を破産させた。東京の株も暴落した。その正体とは、何だろうか?

本書は、日経金融新聞の連載をまとめたもの。豊富な事例やインタビューに、巻末のキーワード、これ一冊で妖怪の素性がわかる仕組みになっている。

とは言え、敵は手ごわい。なにしろ、高度な金融数学を駆使しないと理解できない代物なのだ。そこをあえて言えば、デリバティブはまず、経済の国際化の産物だ。世界にま

デリバティブ・新しい金融の世界

日本経済新聞社編



（日本経済新聞社・1,400円）
1月6日発売。3月14日トーハン調べ「ビジネス書の部」17位。5万部。日経金融新聞に94年6月から12月まで連載した記事をもとに再構成。「話題性も手伝い、読者は金融関係や企業の経理担当のほか、一般のビジネスマンにも広がりを見せている」と版元。

妖怪の素性明らかに

「取引ときている。経営者も知らないあいだに担当者が大穴を開けている、なんていうことが起るの、もそのためだ。」

経済の先行きが不透明ないま、デリバティブを組み込めば、安いコストでリスクを回避できる。でもそれは、ババ抜きのパパが回ってきたときの用心に、ババ

を押しつける相手をあらかじめ見つけておくようなものを。みんながデリバティブをやれば、だれかにババが集まって倒産、かえって市場の混乱が拡大する危険も覚悟しなければならぬ。

デリバティブは、正常なリスク回避の手段がいつの間にか投機になってしまつた危険な商品だ。しかし、いったん始まった流れは止められない。日本の会計・税制が時代遅れでデリバティブ取引に不都合だからと、外資が逃げ出し、東京市場が空洞化し始めている。下手に規制しても、その動きに輪をかけて。やっかいな金融商品とつきあわなければならぬ、資本主義の新しい段階が始まった。

読書

ベストセラー診断

橋爪大三郎(社会学者)

金もうけの神様・邱永漢氏の名は中国でも有名だ。対するは、スバリ直言の竹村健一氏。両氏のクロストークが「引き潮」金欠状態にあえぐ不況日本への処方せんを明らかにする。

世界人口の二にすぎない日本人が、世界の預貯金の何と四〇%、千兆円を保有している。戦後半世紀、営々と働いた汗の結晶だ。だがその割に、豊かさの実感がない。金の使い方を知らず、米国債を買い漁(あさ)るのが関の山なのだ。不況は根が深いとみる点で、両氏は一致している。大恐慌は、世界経済の中心がイギリスからアメリカに

邱永漢、竹村健一著

「引き潮」の経済学



(PHP研究所・1,000円)
6月13日発売。27日トーハン調べ「ビジネス書の部」7位。4万部。「社会的に関心の高いうちで、と始めた1000円本、シリーズのひとつ。2人の著者それぞれに固定したファンがいるので、その分、部数も伸びている」と版元。

若者はアジアで起業を

本が苦しむ番だ。と言っても、アメリカの次の大国が、すぐ日本というわけではない。当分は米・独・日の「三國志」時代が続くと両氏はみる。その間、世界は海図のない海をさまよっているのである。とすれば、八〇年代のピークを過ぎた日本経済が、起業すべきだという、邱氏の激励の言葉だった。簡単ではないだろうが、国境にこだわって仕事をしていても、じり貧になるのは目に見えている。海外勤務は仕事を覚えるチャンスだから、喜んで引き受けて、折をみて独立しなさい。——そんな勧めに応(こた)える企業人が続々現れるなら、日本の先行きも心配ないのだろう。

読書

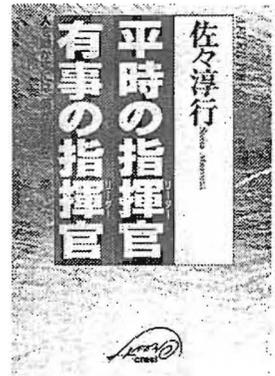
ベストセラー診断

橋爪大三郎(社会学者)

阪神大震災、地下鉄サリン事件と、信じられない突発事態が連続し、強力なリーダーの必要性をだれしも感じ始めた。折しも、初代内閣安全保障室長・佐々淳行氏の書き下ろしが店頭に並ぶ。いいことが書いてあるかもと、人々の手が伸びるのも不思議はない。

佐々 淳行著

平時の指揮官 有事の指揮官



(クレスト社・1,600円)
3月25日発売。5月9日トーハン調べ「ビジネス書の部」8位。4万部。「読者はサラリーマンや自営業者、会社役員ら男性が中心。社内研修用テキストに用いる例も。この手の本は従来、精神訓話が多かったが、本書は具体的で実用的と好評」と版元。

リーダーの心得を説く

本組織文化なのだ。佐々さんの本を読んで歯がゆく思うのは、現場指揮官が頑張ったぐらいでは、リーダー不在の日本の組織をいかにともしがたいことだ。現場指揮官のノウハウは、たしかにすべてのリーダーに参考になる。けれども、上から下まで国民がこぞって決断を回避したがつているこの国で、果たして敢然と意思決定を下すことのできるタイプのリーダーが現れるだろうか? 唯一の解決は、すべての企業や官庁が「危機」をまず念頭に組織に編成替えすることだろう。それには国民が、「危機管理」に高い優先順位を与えることだ。そういう提案として、この本を受け取りたい。

ニューアルのつとより、リーダーの心得を説いていく。点と云えば、有事の際に具体的な提案は決してむずかしくない。部下の名前を覚える、時間厳守、身だしなみから始まって、部下のほめ方しかり方など、結構細かい。危機管理らしい。具体的には、有事の際にシフトサーキット(職階を飛び越して報告・命令する)を覚える、時間厳守、身だしなみから始まって、部下のほめ方しかり方など、結構細かい。危機管理らしい。

できない村山首相に、リーダー失格を宣言する。だが日本のリーダーたちは、たいがい、現場指揮官の出身でないし、危機管理教育も受けていない。閣議も自民党総務会も企業組織も、根回しと全員一致型コンセンサスでできている。決裁しても決断しないのが、日

ベストセラー診断

橋爪 大三郎(社会学者)

不況は五年目を迎え、しかも今年はいちや二ニースばかり。嘘(うそ)でもいから景気のいい話はないものか。そんな読者にぴったりなのが、この一冊だ。著者は今回の不況を、多分に心理的なものと診断する。国内総消費の(五七%)の個人消費が……活性化すれば、日本の経済はいっぺんに回復する。本書は、日本経済カンパリの応援歌なのだ。

デフレ繁栄論

唐津 一著

の組み立て産業は、海外と競争にかなわない。たが、工作機械や工業素材の分野は、ますます日本の独壇場だ。技術力を磨き、生産性を向上させること。それにはボトルネックを探せ

日本経済への応援歌

日本を強くする逆転の発想

唐津一 デフレ繁栄論

(PHP研究所・1,000円) 8月24日発売。10月9日トーハン調べ「ビジネス書の部」で6位に入った。4万部。「日本を強くする逆転の発想」という副題がつく。「読者層は著者のファンと同じで、課長職以上のビジネスマンや中小企業の経営者が多い」と版元。

戦略としては説得的だが、マクロ経済への処方箋(せ)ん)としては簡単すぎた。もうひとつ本書で納得できるのは、サービス産業は生産性も賃金水準も低いので、今後徹底した合理化はからなければならぬとする点。例えば役所は、不要になった規制をどんどんやめ、仕事を少なくしなければだめだという。デフレ・物価の値下がり、生産性向上のためのもので、お金の価値が上がったのだからむしろ喜ぶべきだと著者は言う。物価の一種である賃金も下がるから、私は素直に喜ばないが、インフレの時代が去りデフレ時代が到来したという著者の指摘は正しい。企業環境はいよいよ厳しく。

ベストセラー診断

橋爪大三郎(社会学者)

ノルウェーの作家、ゴルデルの『ソフィーの世界』が世界中で爆発的な売れ行きという。翻訳で六百以上、ずしりと重たいが、読めばなるほどベストセラーと納得の出来はええだ。

ヨースタイン・ゴルデル著

ツボ押さえた哲学講義

そしてもう一人、同い年の少女ヒルデの謎まで。ソフィーにはなぜか、ヒルデあての絵はがきも届くのだが、やがて意外なことでん返しが待っている。これは読んでのお楽しみ。

リンの壁が崩れ、マルクス主義が店じまいしたあと、行く先なしの迷走状態でふらふらの地球には、ぜひとも道しるべが必要だ。それを人びとは、哲学に求めるのだから。著者ゴルデル氏は、高校で長年哲学を教えていただけあって、ツボを押さえた

ある日の午後、「あなたはだれ?」と書いた手紙を受け取る。中年の哲学者アルベルトとの不思議な交流の始まりである。以後、小包みが届くたび、プラトンやアリストテレス、トマス・アキナス、デカルト、ヘーゲルといったおなじみの哲学者たちの世界が、ソフィーを新鮮な発見の喜びで満たしていく。

ソフィーの世界



(池田香代子訳・日本放送出版協会・2,500円) 6月30日発売。須田朗監修。8月29日トーハン調べで総合1位。58万部。ドイツでは93年の発売以来120万部売れている。「日本でも発売以来、ほぼ毎週増刷。愛読者カードでは読者は11歳から86歳まで。10代、20代が一番多い」と版元。

講義はなかなか見事だ。ツサールやハイデガー、ヴィトゲンシュタインといった二十世紀哲学がすっとはされているのが残念だが、スタンダードな西欧哲学の伝統が、これほど生き生きとコンパクトに整理されているのは見たことがない。そのまま大学教養課程のテキストに使えると「解説」にあるが、その通りだ。池田香代子さんの翻訳もすべしもの。カントの理論性に「あたまたのなかのりくつ」とルビをふるなど、なかなかかゆ(き)えてい。わが国も折から哲学ブームで、わかりやすい入門書が書棚にずらりと並んでいるが、本書を選べば間違いない。二千五百円はほんとうに買い得です。

読書

1995年(平成7年)12月24日 日曜日

「週刊文春」連載のコラム「新宿赤マント」約一年分をまとめた大作目。お厚い固定ファンに支持されて毎回のベストセラーだ。ページを開けばそこはシーナ・ワールドという、安心感がえがたいであろう。売れっ子の椎名氏は、締め切りに追われつつ全国を駆け回る。愛用のバッグに原稿用紙と身の回り品を詰めこみ、旅先のホテルだろうとタクシーの中だろうと書きまくる。いきおい、とりとめない身辺雑記風のスケッチが多くなる。その文章の、絶妙のふわふわさ加減が著者の持ち味だ。

時にはうどんのように

ベストセラー診断

椎名 誠著

橋爪大三郎(社会学者)

絶妙のふわふわさ加減



(文芸春秋・1,200円)

11月18日発売。12月20日トーハン調べで単行本「文芸」部門24位。10万部。タイトルは「うどんになってだし汁の中に仲間と一緒にからみあってじっと気分を表したものだ。インパクトが強かったのか、今回は増刷が早かった」と版元。

似たような生活の瑣事(さじ)に「喜一愛してくれている」と、なんとなく仲間のように安心する。たまに批判されても、ぬいぐるみのクマさんみたいな氏のことだから、トゲがない。こんなになんかきめてもらわないといけないなんて、サラリーマンも主婦も、そんなにつらい毎日なのか。『時にはうどんのように』の書名のとおり、椎名氏と読者の共同体は、温かいが自閉的だ。今二十代の頃(ころ)は「赤旗」日曜版を配達していた」という椎名氏だが、その後は意識して社会情勢から身をひいてきた。折からの震災やオウムも、このエッセーにはわずかの影を落とすのみ。食べ物をたべるシーンがやたら多く、あとはどうやって眠ったかなど身体感覚の話題が大部分の本書は、大状況に流されない個人生活の手ごたえを信じさせてほしいとどこかで願っている、郊外に住む典型的な中産階級の人びとの神話か呪文(じゅもん)ではないかと、も感ずてくるのだ。

1995-8-4/4

トム・ピーターズの経営破壊

名紙・誌絶賛!

日本経済新聞(1/15)書評
米国の経営学者、評論家の説には常に時代を切り取るなにかしらのキーワードが含まれている。経営現場を熟知しているだけに、的確な羅針盤を与えられる。

日経ビジネス(1/2号)書評
ついにトム・ピーターズは、スポンを脱いだ。過去の成功という「幻想のスポン」を引きずる企業人にこそ読んでもらいたい一冊だ。

朝日新聞(1/22)「ベストセラー診断」書評
ピーターズ氏の機関読のような語り口に説得力を感じるのは、彼が、いまマルチメディア時代を迎えつつある企業環境の厳しさをしっかり見せているからだ。

15万部突破!



大前研一氏 推薦!

紀伊國屋書店本店/丸善
日本橋店/三省堂書店
神田本店/旭屋書店銀
座店/有隣堂西口店/
虎ノ門書房ほか
全国有力書店でベストセラー



トム・ピーターズ 平野勇夫訳
「リストラ、リエンジニアリングでは生ぬるい。従来の経営と組織の常識を徹底的に破壊せよ」。『エクセレント・カンパニー』の著者が二百年に一度のビジネス環境激変期を乗り切るための経営モデルを企業の実例で説く。●定価1600円(税込)